

表題

「ヤツチイ」

山下孝行

あらすじ

伊東の漁村でけんかにあけて、いつか本物のヤクザにあこがれる竜次と洋そんな希望をもって、新宿で念願かなってヤクザの道へ。しかし、外から見ると内側から見る世界悩む竜次、やくざ同士の抗争から事件を起こし洋とともに刑務所送りとなる。そこで出会った牧師の勧めで沖縄行きを決める。特別養護老人ホームで働き始め、その人たちの交流により少しずつ癒やされていく、追いかけてきた洋とともに楽しい生活を始めた。いつしか、年寄りからはか愛情を込めて呼ぶ「ヤッチイ」とまで呼ばれるようになった竜次であったが。

登場人物表

島田竜次	22歳	洋の先輩でヤクザになったことに悩む
山田 洋	19歳	幼馴染の竜次にあこがれる
柏木 輝	35歳	須藤組若頭で竜次と洋の兄貴分
下村久美	32歳	小料理屋ひさみの女将で柏木の内縁の妻
須藤幸造	51歳	須藤組会長で短気
佐々木剛	59歳	竜次の服役していた刑務所の刑務官
塚田 正	62歳	沖縄行きを勧めた牧師
古見 繁	62歳	老人ホームの園長
古見雅子	56歳	寮母主任で園長の妻
喜屋武学	42歳	老人ホームの養護課長
当山亜紀子	24歳	老人ホームの事務員
奥間ウト	78歳	∞号室入居者
与儀勝江	40歳	寮母
新垣恵美子	76歳	∞号室の入居者
川満尚子	30歳	寮母
山田静江	42歳	老人ホームに勤める看護婦
下地カマド	88歳	5号室の入居者

1 新宿歌舞伎町の路上 (昼)

週末の昼下がり

初夏の日差しがアスファルトに跳ね返り
むせ返るような暑さ。

こんな狭い一角にこうも人がいたのかと
思うほど雑多人ごみ。

行きかうほどにすれ違う人たちが気使う
ことをしなければ、すぐにでもぶつかっ
てしまいそうなそんな人ごみである。

両手をズボンのポケットに入れ背を丸め
て地面を睨みつけるような形相でうつむ
きながら、歩く島田竜次(22歳)。

その後から人ごみに目を移しながら、落
着きなくついて行く山田洋(19歳)

洋「兄貴ジユクはいいつすね！」

竜次「・・・・・・」

無言で歩き続ける。

洋「都会の姉ちゃんは、なんか人種が違うつ
て感じっす。俺感激っす！」

独りで話しながら、通りすぎる若い女性
に愛嬌をふりまきながら歩く。

竜次「馬鹿面さげて歩いてんじゃねえよ。田

舎丸出しじゃねえか」

吐き捨てるように言うときまた無言で歩き
続ける。

洋「(少し不満そうに) へえ」

首をちよこつとすくめ、表情も硬くなつ
て黙って竜次の、後について行く。

2 喫茶ルミネの前 (昼)

新宿歌舞伎町の路地裏にある喫茶ルミネ

竜次「寄ってくぞ」

洋「えっ！」

竜次「いいからついて来い」

そういうと、スタスタと喫茶ルミネのガラス戸を、開けて入って行く。慌てて、その後を追って入って行く洋。

3 同中 (昼)

薄暗い間接照明の店内。

若い女性客が目立つ。

場違いな二人が入って来たことに、店内の視線が一瞬竜次たちに注がれた。

慣れた様子で、奥のボックス席に陣取る

竜次。

その後から、おどおどとついて来てすわる洋。

洋「兄貴、事務所に行かなくていいんすか」定型文」

竜次「ああ、今日は当番じゃねえから、後で顔だしやいいんだ」

洋「そうっすか」

ウェイトレスが、水とおしぼりを運んで来た。

ウェイトレス「御注文は決まりました」

竜次「フルーツパフェ、お前は」

洋「コーヒー熱いやつ」

立ち去るウェイトレスクスツと笑う。

洋「兄貴、フルーツパフェはいけませんぜ」

竜次「好きなもん注文して何が悪い」

洋「いや、そういうことじゃなくてなんちゅうか(もごもごといいにくそうに口ごもる

)」

ウェイトレス注文のフルーツパフェとコーヒーを、テーブルに置くと吹き出しそ
うな気持ちを抑えて立ち去る。

運ばれてきたフルーツパフェを、うまそうにほおぼる竜次。

ゆつくりとコーヒーを口に運ぶ洋。

洋「兄貴、俺思うんすよ」

少し間があいて。

洋「俺達は、世間に舐められたらいかんて思
うんすよ」

竜次「世間とフルーツパフェとどんな関係が
あんだよ」

洋「なんちゆうですか、威厳というか世間様
に対して、怖い存在でなきゃいけないと思
うんすよ」

竜次「威厳だ！俺達はそんな上等なもんじゃ
ねえよ、世間に迷惑をかけねえように、小
さくなって隅っこで生きてりゃいいんだよ」
洋「兄貴、変わっちゃまったつすね」

しばらくの沈黙の後

竜次「洋、伊東が懐かしいなあ」

洋「（すこし戸惑ったように）そつすね」

竜次の変化に、寂しく感じる洋。

4 (回想) 伊東の港を見下ろす丘 (夕)

眼下に夕日に照らされた伊東の市街とそ
の先に港が見える。

海が赤く輝いている。

5 タイトル「ヤッチイ」

6 須藤組事務所会長室 (夕)

会長須藤幸造(51歳) ソファに座って、
声を荒げている。

その両脇を固めるように座っている幹部。
神妙に聞き入っている。

須藤「おい、おめえらこれでいいのか。えっ

どうなんだ」

沈黙のままの室内

須藤「情けねえじゃねえか、こんだけの男がよ、雁首揃えてよ」

腹立たしげに、禁煙パイプをテーブルに投げつける須藤。

ゆっくりとした口調で話し出す若頭の柏

木輝（35歳）。

柏木「おやじはそういいますけど、元はといえば内の矢崎が、東進会の店から女を引き抜いちゃったのが原因ですぜ」

須藤「おい！腰抜けほざくなや、そのことこの落とし前は、神戸のおじきが間に入って手打ちになったじゃねえか」

黙り込む柏木。

須藤「おめえらはどうなんだ、これ以上島内を東進会のやつらに荒されて、それでしのごでできるんか」

柏木「おやじの気持ちはわかっとなるつもりです。しかし、神戸のおじきがおっしゃたじやねえですか、暴対法の御時世、いくさになりやお互い傷は深い、だから自重するようにと」

須藤「暴対法だ、ふざけるな！そんなものが怖くて面子たてられねえくらいなら組解散したほうがましじゃ。どの面さげて極道張ってゆくんじゃ。わしや、ひとりでもやるからのう」

少しの沈黙

柏木「おやじがそこまでおっしゃるならわたしにまかしてくれませんか」

須藤「ほう、腰の抜けとるお前にか」

柏木「へえ」

須藤「そうかい、預けてもええぞ。じゃがの

う半端なことしよつたら、てめえも弾くぞ
性根据えてやれや」

7 須藤組事務所事務室 (夜)

会長室からは、須藤の罵声が隣の事務室
までも響いている。

組員3名声が聞こえるたび、張り詰めた
空気に緊張して、椅子に座っている。

そこに、ひよっこり入ってくる竜次と洋

竜次「おうすっ！」

洋深々とおじぎをして入る。

竜次緊張している組員堀田健一(24歳)
に近付き

竜次「おやしそうとう荒れとるな」

堀田「これからいくさになるかどうかつと
きによ何呑気なことというとるんじゃ」

竜次「いくさじゃと、こんなときに戦争おつ
ぱじめるなんて正気じゃねえぞ」

堀田「だから頭が一生懸命止めてるんじゃね
えか」

竜次「頭もたいへんだよな、血の気の多いお
やじを持つとよ」

少し紅潮させた顔の柏木が、会長室から
出てくる。

竜次のそばまで来ると

柏木「少し付き合え」

竜次「へえ」

事務所を出て行く柏木の後に続く。

8 小料理屋ひさみ (夜)

花園神社裏手に当たる界限。

人通りも少ない路地裏。

カウンターだけの小さな店内。

小奇麗にされた店の中。

柏木と竜次が黙って酒を飲んでいる。

女将の下村久美（32歳）割烹着姿でカウンターの_中で酒の肴を作っている。

久美「あんたたち、さっきからなによお通やみたいに黙って」

柏木「（疲れた様子で）今日はゆつくり飲ませてくださいよ」

久美「今日の輝さん少し変よ」

柏木「そうかい」

そういいながらおでんの大根を箸で切り分けている。

久美「とても疲れてるみたい」

竜次、柏木の横顔をちらりと見て

竜次「今日おやじともめたんすよ、頭」

久美「そうなの」

心配そうな顔つきで柏木を見る久美

柏木「いらんこと言わんで飲め」

そういいながら竜次に酒を注ぐ。

久美黙ってカウンターを出て、外の暖簾をしまい、看板の灯りも落としてしまう。

久美「今日はもうお店閉めちゃうわ、どうせ開けててもお客来ないし」

柏木「おいおい、いいのかよまだ8時過ぎだぜ」

久美黙って柏木の横に座り甘えるように

久美「いいの、それより私にも注いで。」

まんざらでもなさそうな柏木、銚子を取り久美に酒を注ぐ。

久美「今日は、酔ちゃおうかな」

ふたりのやり取りを見ていた竜次

竜次「おふたりお似合いです」

そういつて照れる

柏木「馬鹿野郎、からかうな」

いつしか久美は、カウンターにもたれて

寝入ってしまった。

その背中に柏木背広の上着を、やさしくかけてやる。

竜次「頭、今日はお疲れさんです」

柏木「竜次、お前この世界に入って後悔しねえか」

竜次「いえ」

柏木「すまなかつたな、こんな世界におまえをひきづりこんじまって」

竜次「自分どこも行くところないっすから」

柏木言うことをためらうように

柏木「竜次、今組がどんな状態かわかってるか」

竜次「へえ、なんとなく」

柏木「なんとなくか」

竜次「頭、なんでもいってください。自分頭のためだったらいつでも死ぬますぜ」

柏木「死ぬなんてこと軽く言うな」

しばらく沈黙したまま、ふたり手酌で酒を飲んでいる。

柏木「竜次、弾いてくれんか」

竜次「・・・・・・」

柏木「おまえも、おやじの気性わかつとるやろう。このまま行けば東進会と全面戦争や。そうなればジユクはのうなる。人もぎょうさん傷つくそれだけは極道におるもんとしてどうしても避けなきゃならん。俺達がこうしておてんとうさんの下でまんまいただけのもこのジユクの人達のおかげやこれ以上迷惑かけるわけにいかん」

竜次「俺やります」

小さな杯を持つ手がかすかに震える

柏木「そうか、すまない」

そういうと、竜次に頭を下げる。

竜次「頭、やめてくださいよみずくさいっすよ」

柏木「竜次、弾くっても人はぜったい弾くんですよ」

竜次「えっ、東進会の組長やるんじゃねえすか」

柏木「そんなことしてみろ、本当の戦争になるじゃねえか。そうじゃねえ弾くのは東進会事務所のドアか窓でいいんだ」

竜次「（少し気が抜けた風に）それだけですかい」

柏木「馬鹿野郎、それでも前科一判で五年はくさいめしくらうぞ」

竜次、しきりにカウンターに乗せた両手を強くもんで（ヨッシャ）と小さく力む。

柏木「竜次明日、俺のマンションに来い」

竜次「朝一で飛んでいきまっさ」

それからしばらくふたりは、黙って飲み続ける。

9 新宿御苑前の路上（早朝）

朝が明けたばかりである。

路上に止めてある白のマークII。

くわえたばこで近付く竜次。

車のドアに手を掛けたとき。

ふいに脇の植え込みから洋が現れる。

洋「（ニヤニヤして）兄貴、俺さびしいっすよ。

ひとりでいっちまうんすか。そりやみ

ずくさいっちゆうもんすよ」

竜次「なんでここにいる」

洋「そりやねえっすよ。俺昨日から兄貴達着

けてたんすから」

竜次「そりや、ごくろうさんいいからお前は

帰れ」

ぶっきらぼうにいいすてて、車に乗ろうとする竜次。

洋「(すごい形相で) 兄貴、俺達はどこまでもいっしょだっけいつもいってたじゃないっすか、あれはうそってやつですかい。ひでえじゃねえかおれは兄貴しかいねえんだ」
吠えるように訴えかける洋、しまには泣きじゃくりだしている。

竜次、洋のいきおいに押されて、あきらめたようすで。

鍵を洋にポーンと投げる。

竜次「運転しろ」

喜んでいそいそと運転席に乗りこむ洋。

10 車の中 (早朝)

洋「どう行きますか」

竜次「朝早えからな、靖国通りへでてそのまま8丁目の東進会ビルまで突っ走れ」

洋「へえ！がってん承知ですぜ」

11 靖国通り (早朝)

洋の運転する白のマークIIが朝日を浴びて青梅街道方面へ疾走する。

12 同車の中 (早朝)

竜次、懐にしのばせたコルトを、ギョツとにぎりしめている。
今朝柏木からならった、安全装置の解除方法だけを何度も反芻していた。
膝が少し震えている。

洋、竜次の顔を見て

洋「気分悪いすか」

竜次「(少し苛立っている) うるせえごちや

「ごちゃいいうな、前見て運転してろ」

洋「へえ、」

竜次「なんか音楽でも入れろや」

洋サイドのボックスから適当なカセットを取り出してかける。

車内に中島みゆきの「時代」が流れる。

13 東進会ビルの前（早朝）

閑散としている、住宅街。

人通りもまばらである。

横付けされる車。

洋「兄貴、着きましたぜ」

竜次「・・・・・・」

ゆつくりと車外へ出た。

顔は緊張で紅潮している。

14 車外（早朝）

早朝の通り、人通りのと切れたのを見て、ゆつくりとビルの外階段を上って行く。

ふところに忍ばせた冷たい感触を力強くにぎりしめた、そしてゆつくりと安全装置をはずす。

三階の踊り場から、一軒目のドアに東進会本部と書かれた看板が目に入る。

竜次、深呼吸をひとつすると、ゆつくりとコルトを引き抜きドアへ向かって、続けざまに三発発射した。

静まり返った早朝の大会に、「パーン、パーン、パーン」と破裂音が、ビルの谷間にこだました。

一目散で、階段を飛ぶように降りて行く竜次。

三階付近では、東進会の若い子分達が罵声を浴びせながら、追いかけてくる。

車はエンジンを、唸らせ待ち構えている。後部座席のドアも、開けられている。

15 車内 (朝)

転がるように車に乗り込む竜次。それを機に車は、猛スピードで税務署通りへ向かった。

竜次は、息を切らせている。

コルトはまだ手に張り付いている。

緊張のあまり手が硬直して取れない。

ゆっくりとはがすように指を広げコルトをはずし座席の上に置いた。

心配そうな洋。

洋 「兄貴、だいじょぶですか」

竜次 「ああ」

応えるのがやっとだった。

洋 「これから、どうしやす」

竜次 「百人町のガード越えたら止めろや」

16 百人町ガード下電話ボックス (朝)

遠くパトカーのサイレンの音が聞こえる。

竜次受話器を持っている。

竜次 「竜次です、やりました。」

柏木の声 「そうか、ごくろさん。後はわかっているな。」

竜次 「へえ、頭のおっしやったとおりやります」

柏木の声 「すまねえ」

竜次 「それじゃ俺行きます」

静に受話器を置き、洋の待つ車に乗り込む。

17 東進会ビルの外 (朝)

パトカーが五台回転灯を光らせて止まっ

ている。

刑事一「状況は」

刑事二「はい、ドアに三発ぶち込んだようで

怪我人はいないようです」

刑事一「どこのやつだこんな朝っぱらに」

刑事二「東進会の若いのが見た話では、同業

らしいです」

パトカーの無線を、取り出す刑事一

刑事一「七号車より本部、本部どうぞ」

本部の声「こちら本部」

刑事一「ホシは白のマークⅡ、発砲事件のホ

シは、税務署通りへ逃走した模様。拳銃は

依然所持したままと思われます。封鎖手配

願います」

本部の声「全車両に告ぐ、ホシは白のマーク

Ⅱ。税務署通りへ向かった模様。拳銃は

依然所持したままと思われる為各車十分

注意するよう青梅街道、山手通り、甲州街

道、靖国通り、明治通り、職安通りの封

鎖願います」

新宿駅周辺に鳴り響くサイレンの音。

18 竜次たちの車中 (朝)

明治通り手前。

出勤の人並みが路上を埋めている。

洋「兄貴、これからどうしやす」

竜次「明治通りを右折じゃ」

洋「えっ、兄貴捕まりますぜ」

竜次「いいんじゃない、頭との約束じゃ。今から

俺はジュクのだ真ん中で、自首する。洋悪

いがお前も付き合え」

洋「そうだったんすか、俺は兄貴の行くところ

には地獄の果てまでもお供させてもらい

ますぜ」

竜次「すまんな」

洋「なに言うんですかい、俺兄貴の役に立ててうれしいっす」

竜次「それじゃジユクのだ真ん中、新宿東口幕引きの舞台にするか。歌舞伎町ともしばし別れだからな」

19 明治通り検問中のパトカー（朝）
三台のパトカーが道を塞ぐように止められとおる車を、物色している」

20 同車中（朝）
洋「兄貴、やばいっす。検問ですぜ」
竜次「洋、東口までは、どうしてもいきてんだ突っ込め」

洋「合点ですぜ、兄貴の晴れ舞台じゃねっすか、こんなちゃんけなところでお縄じゃ、山田洋の面子にかかわっちまいます。いきますぜ」

21 明治通り検問中のパトカー（朝）
都営東新宿駅方面から猛スピードで、突っ込んでくる白のマークII.

検問中の警察官一「おい、あれじゃないか」
同警察官二「確かに」
同警察官一「すっげえ飛ばしてくるな。あれじゃ止められんぞ、下手に手を出したら通行人を巻き込むぞ」

同警察官二「追うしかねえな」
同警察官一「全員乗車、追うぞ」

21 パトカーの車中（朝）
疾走して行く竜次たちの車。
その車を追うパトカー三台。

歩道に行く出勤途中の人達が、立ち止まり光景を注視する。

警察官一「こちら五号車、ホシの車発見。ホシは五丁目の交差点を歌舞伎町方面へ逃走中」

本部の声「こちら本部、全車両に告ぐ。ホシは歌舞伎町方面に向かっている。東口のガード手前を完全封鎖しろ」

22 新宿駅東口ガード手前 (朝)

十台ものパトカーが東口のガードを背にして完全に封鎖している。

出勤途中の人波も、ガードの両脇へ分断されている。

23 竜次達の車中 (朝)

新宿駅東口ガード手前50メートル位の所で車を止める。

後部座席の竜次を見る洋。

竜次座席に置いてあるコルトを握り締める。

洋「兄貴、着きましたで」

竜次「洋、世話になったな。お前は後から来い。」

24 新宿東口歌舞伎町横の靖国通り (朝)

ゆっくりとドアを開け、人も車も排除された道路に下り立つ竜次。

歌舞伎町の方に目をやる。

警察のスピーカー「無駄な抵抗はやめて、おとなしく投降しなさい」

竜次右手のコルトを、空に向ける。

そして、一発発射する。

竜次の心「俺は、ここにいるんだ」

銃声におどろいて悲鳴をあげる野次馬。

ざわめきたつ警察。

そこへ竜次の足元にサッカーボールが一つころがってくる。

それを追って、小学一年生位の男の子が飛び出してくる。

竜次そのボールを拾い上げる。

男の子と竜次対峙する。

怯えた目で、竜次の顔を見上げる男の子。

竜次「これお前のか」

こつくりと頷く男の子。

竜次「俺も昔サッカーやってたんだ」

にっこりする男の子。

竜次「うまくなれよ」

そういって、男の子にボールを渡す。

男の子「ありがとう」

男の子もと居た場所の方へ走り去る。

竜次、コルトを背中の中のバンドにはさみ、

両手を大きく上へ伸ばしたまま、警官達の方へ歩いて行く。

十名ほどの警官に囲まれ、すぐパトカーに乗せられ連行される。

置き去りにされた洋、放心状態で道路にでて座り込んでいる。

そこへ、数名の警官が来て洋も連行される。

25 三年後静岡刑務所木工作業室 (昼)
受刑者がそれぞれにもくもくと作業をしている。

刑務官の佐々木剛 (59歳) 監視台から受刑者を見ている。

そこへ若い刑務官が入って来て耳打ちす

る。

監視台を若い刑務官に譲り佐々木監視台から降りて、竜次のそばに来る。

佐々木「103号、面会だ」

竜次「へえ、すいません」

帽子を取り会釈して、佐々木と共に作業室を出て行く。

26 同廊下 (昼)

窓の外植え込みの桜が散っている。

佐々木、竜次と並んで歩く。

佐々木「この風じゃ桜も散ってしまうな」

竜次「・・・・・・」

佐々木「もう三年か夏には仮出所だな。ここを出たらどうする」

竜次「へえ、この間から牧師先生のすすめもあって、ヘルパーの資格取ろうと思ってます」

佐々木「そりやいいな。それじゃ組には戻らないんだな」

竜次「そのつもりで」

佐々木「その世界のこととはわからんが、覚悟して頑張れよ。お前に向いてるかもしれない」

(そういつて佐々木は、にっこりと笑って見せた。)

27 面会室 (昼)

ガラス越しに立ち上がり、竜次に一礼する洋。

洋「お疲れさんです」

竜次「いつ出れたんだ」

洋「半年前です。すぐ来ようと思ったんですが手続が戸惑っちゃまってすいません」

竜次「みんな元気か」

洋「（沈んだ表情で）おやじも勝手ですよ、あんなに腹立てていたのに、東進会と手打ちですよ。全部頭のせいにしちゃまって、その頭も今山梨の刑務所ですよ。こんなことってひでえ話しつすよ」

そういうと、涙ぐむ洋。

洋「兄貴、ここでも組には戻れませんぜ。おやじが破門状だしやがって。これじゃまるでトカゲの尻尾きりですぜ」

竜次「そうか。それより、洋お前伊東に帰れ」

洋「兄貴はどうするんすか。あと三カ月ですよ出所」

竜次「俺か、はっきりはわからんが、どうせ東進会も俺だけは許さんじやろう。だれも知らんところへでもふけるさ」

洋「俺も連れて行ってくれませんか。兄貴といつしよじゃねえと俺」

竜次「そりや無理だ、俺も自分のことであんなにぱっちまってるからよ」

洋「冷てえつす」

竜次「洋、頼まれてくれねえか。伊東に帰ったらよ、おふくろに元気にやっていると伝えてくれや。去年おやじが逝っちゃまって少し老け込んでるかもしれんからな」

洋「兄貴、俺伊東であってやすから。ここでたら必ず来てくださいよ」

竜次「ああ・・・」

洋「きつと待ってやすから」

28 刑務所門の外（昼）

レンガ造りの高い塀沿いに歩いて行く竜次ひとり。

ひび割れた黒革のカバンを下げている。

片手に小さな紙きれを握り締めている。
しばらく行くと駿府城後に出る。
夏の日差しが身体の中まで染みてくるよ
うな暑さ、堀を渡って吹く風が心地よ
かった。

29 教会の前 (昼)

静岡駅の裏手にある小さな教会。
教会であることは、看板がなければわか
らない、普通の民家である。

竜次、握り締めていた紙切れとその教会
の住所を代わる代わる見る。

竜次「ここか」

入り口の呼び鈴を押す。

若い男が出てくる。

竜次「島田竜次です。塚田先生にお取次を」

若い男につこりと微笑むと、中へ消える。
しばらくして、牧師の塚田正(62歳)
あらわれる。

うれしそうに、竜次を抱き寄せ中へ招き
入れる。

30 同教会の応接室 (昼)

塚田「よく来てくれましたね」

竜次「へえ、来ました」

塚田、本当にうれしそうに、竜次に紅茶
を入れる。

それを、ゆっくりと口に運ぶ竜次。

塚田「よく辛抱しましたね」

塚田は竜次の脇の椅子に腰掛ながら言っ
た。

竜次「自分のやった責任ですから」

塚田「そうですね。でも晴れて償いも終わり
これからはの人生の再出発ですね」

竜次はうつむいたまま塚田の話を聞いている。

塚田「あなたはまだ若い、これからいろいろなことに出会うでしょうね。そのたびに心が少しづつ重たくなって行くでしょうね。その重さを感じながらあなたは、本当のやさしさや強さを見つけることでしょう」

竜次「・・・・・・」

竜次には塚田の言っている意味があまり理解できなかった。

塚田「そうでした。今日お見えになったのはこれからのことでしたよね」

竜次膝に手をあて座ったまま頭を下げた。塚田、テーブルを立つと、応接室の壁際に据付けてあるライティングテーブルの引き出しから一通の封筒を取り出し、テーブルに座りなおした。

塚田「あなたが、あそこで泣きながら自分の生き方を変えたいと訴えた、あのときの真剣な目、わたしはそのお手伝い出来ることとがうれしいです」

竜次「(うつむきながら) ありがとうございます
ます」

塚田「あなたが言われたように、私も誰も知らない遠い場所で再出発することの方が良いと思いますよ」

手にしている封筒を竜次に手渡す。

塚田「そこにはあなたのことが書かれています。それはあなたにとって都合の悪いこともです」

竜次、渡された封筒に見入っている。

塚田「人が横道にそれずに生きていくことで一番の支えは、世界中でただひとりでいいその人を心から信じてくれる人がいること

だと思っんですし、しかも身近にいればなおいい、そんな気持ちで、書いた紹介状です」

竜次は、熱いものがこみ上げてきそうになった。

塚田「いつ発ちますか」

竜次「明日にでも発とうと思います。長くなればまた面倒なことが起きないとも限りませんから」

塚田「そうですね。先方へは今日中に電話入れておきます」

竜次、椅子から立ち上がり、深々と礼をする。

塚田「それじゃ身体に気をつけて頑張つて下さい」

そう言うのと両手を差し出し竜次の手をとり強く握手する。

31 静岡駅新幹線上りホーム (昼)

平日の午後。

人影はまばら。ホームベンチに腰掛けている竜次。

カバンから小さな時刻表を取り出し、見入っている。

竜次「(つぶやくように) 熱海着四時二十五分か、無理かな」

ホームに流れる、列車案内の放送。

アナウンス「1番線に上りこだま二十一号到着いたします。」

こだま二十一号がホームに入ってくる。乗り込む竜次。

32 こだま二十一号車内 (昼)

車内は意外と空いている。

車輻の後部座席に腰を下ろす。

しばらくすると、寝入ってしまふ。
いつしか車内に西日が強く差し込んでく
る。

丹那トンネルの長い闇を抜けると、そこ
には竜次の見慣れた海がひろがっている。
車内アナウンス「次は熱海、熱海に到着です。
降口は左側のドアになります」

夕日に照らされた海を心に焼き付けるよ
うにじっと見つめている竜次。
水平線に浮かぶように初島が、輝いてい
る。

幼い日父親と釣りに行った思い出のある
島が見える。

うつすらと目頭が熱くなってきた、おそ
らくもう二度と訪ねることもない故郷へ
の決別の瞬間である。

33 東京駅構内 (夜)
仕事帰りの人ごみ。

その中に紛れるように山手線のりばへ急
ぐ竜次。

34 浜松町駅前のビジネスホテル (夜)
小さなビジネスホテルだった。
それでも客は、ロビーにちらほらといる。
フロントには中年の男がひとり立ちなが
らしきりにテーブルのパソコンに打ち込
みをしている。

竜次うつむきながら男の前まで行く。

竜次「すみません」

フロントの男ぬうといきなり目の前に現
れた竜次に一瞬おどろいたようすで。

フロントの男「あつ、いらっしやいませ。
御予約は」

竜次「いえ、予約はしてません」

フロントの男「(怪訝そうに) はぁそうですか。それでしたらこれに連絡先とお客様のお名前をお書きください」

竜次、渡された紙に伊東の住所と偽名の山門清志と書いた。

竜次の書いた紙を見ながら、フロントの男。

フロントの男「山門様一泊ですね。明日の朝食はどうされます」

竜次「朝早いのでいいです」

フロントの男「そうですか、では前金で4千五百円になります」

古ぼけた財布から支払をする。

覗き込むように見ているフロントの男。

フロントの男「お部屋は六階102号室になっております」

フロントの男鍵を竜次の前に差し出す。

35 102号室 (夜)

ベッドの上に身を投げ出すように仰向けになる。

天井を見つめている。

そしてしばらく目を閉じている。

いきなり身体を起こすと、ベッドの脇に置いてあるカバンを取り出す。

中から古ぼけた手帳を取り出す。

部屋の受話器を取り手帳を見ながら電話を掛ける。

竜次「もしもし、山田さんのお宅ですか。洋さん居ますか」

洋の電話の声「はい、洋ですけど。えっ！兄貴ですか。いつでたんですか。言ってくればお迎えにいったんすよ。今どこですか

い」

竜次「東京だよ」

洋の電話の声「俺明日にでも、そっちに行きますから」

竜次「いや、明日の早朝には東京離れる」

洋の電話の声「兄貴、そりやねえっすよ」

竜次「わかってくれ、これからはそれぞれの道を歩いていくしかねえんだ。なっ！わかってくれ」

洋の電話の声「（泣き声になっている）兄貴

俺を見捨てるんすか。あにきよ」

竜次「すまねえ。洋幸せになれよ」

ガチャンと乱暴に電話を切る。

電話が終わると、なぜか悲しくてそして寂しかった。

ベッドに横になると、わけも泣く涙があふれてきた。

36 羽田空港発着ロビー（朝）

早朝の閑散としたロビー。

客はほとんどいない。

女が幼い子供を膝に抱えて、椅子に座っている。

子供女の顔を見つめて

子供「とうちゃんはなんで来ないの」

無言で弱々しく微笑みながら子供を、見つめる女。

そのまま子供を、強く抱きしめ泣き崩れてしまう。

そんな光景を黙って見つめている竜次。しばらくして、売店に行きオレンジジュースを3個買い、子供と女のところへ行く。

竜次「ぼうず、はい」

とってジュースを子供に二つ渡す。

子供受け取りながら、女の顔を見る。

女、いきなりの差し入れに戸惑いながら。

子連れの女「すいません。ありがとうございます
ます」

竜次「ここ座っていいかい」

子連れの女「ええ」

竜次女の横にすわる。

竜次「一人旅は寂しくて、なんとなく人と話
がしたくなっちまってき。迷惑かい」

子連れの女「いいえ」

竜次「帰るのかい」

子連れの女「ええ」

竜次「俺はまだ行ったことがないんだ。どん
なところだい」

子連れの女「いいところですよ。どんな人も

包み込んで、癒してくれるような島です」

竜次「どんな人でもかい」

子連れの女「ええ、どんな人でも」

竜次女の膝でジュースを飲んでいる子供
に向かって。

竜次「ぼうず、虹を見たことあるか」

子供、こつくりとうなづく。

竜次「俺な金色の雲に乗って虹をつかみに行
くんだ。幸せって虹を」

子供「ぼくも、捕りに行きたいなあ」

竜次「そうかい、俺より早く捕まえることが
出来るよ」

子供「ほんとうに」

竜次「ああ、本当だとも。ぼうずがかあちや
んをしつかり守ることが出来ればな」

そういつて、子供の頭をなでる。

竜次「悲しいことってやつは、いつかその何
倍もうれしいことが来るための、肥やしみ

たいなもんさ。今死ぬほど悲しくても、幸
せってやつが来るとうそみてえに笑える
もんさ。元気で行こうぜ、あんたの生まれ
た癒しの島へ」

子連れの女「ええ」

そう言つて子連れの女は、微笑んだ。

37 那覇空港到着ロビー (朝)

平日のロビー。

ほどほどの混雑。

観光の団体が、何組かロビーに固まつて
いる。

子連れの女竜次に、礼をして去つて行く。

子供が竜次に手を振っている。

竜次も小さく手を振る。

島田竜次様と書いた紙を持った喜屋武学
(四十二歳)、しきりに到着ロビーの出

口付近を見ている。

竜次、気がついて男の方へ近寄り。

竜次「島田です。」

喜屋武「きやんです。お疲れ様」

竜次「すみませんです。わざわざ迎えてもら
いまして」

喜屋武「いいじゃないですか。これからは仲
間ですから。それよりヤーサしてないです
か」

竜次「ヤーサですか、はい、自分ヤサは静岡
でした」

喜屋武「えっ！こりゃ失礼。お腹すいてませ
んか」

竜次「はあ、少し」

喜屋武「近くに美味しいそば屋があるんです
よ。私ね那覇に来るときの楽しみが、そこ
のそばを食べることなんですよ」

そう言つて、喜屋武子供のようにうれし
そうな顔をする。

38 そば屋琉球店内 (昼)

黒墨の柱とテーブル琉球かすりの座布団
の置かれた椅子。

昼前のせいかな、客は少ない。

向かいあつて沖縄そばを、食べている竜
次と喜屋武。

喜屋武「どうです。ソーキそばの味は」

竜次「はあ、ラーメンともうどんとも違う、
不思議な味ですね。でもうまいっすね。」

竜次、ラーメンのほうかうまいと思つた。
喜屋武「そうでしょう。透き通つたスープそ
れでいてこくがある。麺のよじれがまたス
ープにからんで腹の底につくまで裏切らな
い。そしてソーキ。それ骨付きの肉ですよ。
これがまた甘辛くて絶妙な組み合わせです
よ」

39 那覇から沖縄市へ向かう車中 (昼)

沿線のビル。

交通量多い。

喜屋武無言で車を走らす。

竜次、助手席から移り行く景色を見つめ
ている。

40 老人ホーム愛の園駐車場 (昼)

北中城村の高台。

眼下にコバルトブルーの海が、強烈な太
陽に照らされて輝いている。

41 同ホームの事務所前 (昼)

喜屋武と竜次連れ立って建物の中へ。
事務所のドアを開け中へ声を掛ける。

喜屋武「着いたよ」

事務長の島袋聡史（五十五歳）と、事務員當山亜紀子（二十四歳）喜屋武の後ろに立っている、竜次を覗くように見る。

亜紀子「園長が部屋へどうぞって」

竜次、中の人達に頭を下げ、喜屋武の後について行く。

42 園長室の中（昼）

執務用の大きなテーブルの手前に、応接用のソファアがしつらえてある。

園長古見繁（六十二歳）牧師服を着て、笑顔で立って出迎えた。

古見「お疲れ様、よく来ましたね」

竜次「島田竜次です。」

そう言っ深々と礼をした。

古見「古見です。はいはい、知ってますよ。

塚田先生から聞いてますから。さあ、そこへ座って下さい。喜屋武さんもご苦労様でした。どうぞ御一緒に」

園長室と事務室と境のドアから當山亜紀子が冷たい麦茶を持って、入ってきた。

亜紀子「麦茶どうぞ」

古見「紹介しときましょう。當山亜紀子さん。経理をしていただいています。美人でしょう。それでいてまだ独身なんですよ」

亜紀子「園長また、余計な事を」

古見「いやいや、これは失礼しました」

亜紀子「それより園長、ちょうどお昼のミーティングの時間です。島田さん御紹介さねたらどうですか」

古見「そうですね。あなたやつぱりいい奥さ

んになりますね」

43 寮母室 (昼)

こじんまりとした室内。

真ん中に大きなテーブルが据えられている。

職員が張り付くように座っている。

古見「ごめんなさい。いいですか」

中央に座っている寮母主任古見雅子(五十六歳) 古見園長の妻。

雅子「はい、なんでしょうか」

古見「新しく来られました。職員の方を御紹介させてくれませんか」

雅子「島田さん来られたんですの。どうぞ」

古見「ありがとうございます」

古見、竜次をみんなの前に押し出すように立たせる。

古見「みなさん、新しいお仲間を御紹介いたします。島田竜次さんです。今日本土から来られました。それでは、竜次さん自己紹介をお願いします」

竜次「(おどおどとして) しつ、し島田竜次です。こういった仕事は始めてで、なんも知らない若輩ものです。よろしゅうたのんます」

竜次のあいさつのしかたがおかしかったのか、一同笑う。

雅子「なんか、おかしいわね。でも、竜次さんよろしくお願いしますね」

古見笑顔でその様子を見ている。

古見「勤務は、明日から当分の間は日勤ということで、それじゃみなさんよろしくお願いしますね」

44 園長室 (昼)

ソファ―に座って向かい合う古見と竜次二人。

古見「竜次さん、ここへ来られたからにはもう過去は捨てなさい。そして、新しく出発しましょう。塚田先生からすべてお聞きしています。これからは、あなた自身の本当の生き方を探してください」

竜次「・・・」

うつむいたまま無言

古見「明日から、頑張りましょう。それから、アパートと中の必要な物は準備してあります。これから喜屋武さんが案内してくれま
すから」

古見隣の事務室へ行き、喜屋武とともに戻ってくる。

古見「それじゃ、喜屋武さんよろしくお願ひしますね」

喜屋武「はい」

喜屋武園長室を出て行く、古見に礼をして喜屋武の後について出て行く竜次。

45 竜次のアパート (夕)

施設から歩いて五分程の、丘の上にあるアパート。

モーター街のはずれにあり、民家も少ない。

周囲は遮るものもない、ポツンと建っている。

46 同部屋の中 (夕)

部屋には、必要な調度品が揃えられ。すぐにも生活できるようになってい

る。東向きに大きな窓が開けられ、ちょうど

夕日に照らされた、沖縄の海が美しく輝いている。

喜屋武「竜次さん、明日から頑張りましょうね。それじゃ、お疲れでしょうから私はこれで。あつ、それから食べる物は先ほど亜紀子さんに頼んで冷蔵庫の中に入れてありますから」

竜次「なにからなにまで、すみません」

竜次、外の景色を眺めながら、言った。

喜屋武「ここ景色じょうとうでしょう。園長の知り合いの方が、持ってるアパートなんですよ」

竜次「・・・・・・」

喜屋武「それじゃ私、これで失礼しましょうね。明日また」

竜次「今日は本当にすみませんでした。明日からよろしくたのんます」

部屋を出て行く喜屋武を、戸口まで見送る竜次。

喜屋武が、出て行くと急に孤独感が襲ってきた。

無性に寂しくなった。

わけもなく涙が、出てくる。

目の前に広がる真っ赤に染められた夕日の海が次第に、夜の訪れに色を失って行く。

竜次は、独り言のようにつぶやく「こんな遠くまで来てしまったんだ」と。

47 愛の園寮母室 (朝)

職員が集まっている。

雅子が朝の朝礼で、話をしている。

その横に立っている、竜次。

雅子「今日から皆さんと共に、働いていただ

く島田竜次さんです。昨日出勤されたかたは、すでにお会いしてますね。当分の間は、日勤で私といっしょに仕事を覚えてもらいます。さあ、それでは、今日も元気に働きましょう」

48 愛の園廊下 (朝)

竜次、寮母室を出て行く雅子の後に続く。雅子「朝は、朝食の配膳と介助があります。それでは、利用者みなさんに紹介しましょうね」

雅子、竜次を連れて、各部屋を廻り紹介して行く。

竜次そのたびに、ぺこぺこ頭を下げている。

49 同居室8号室の中 (朝)

8号室、奥間ウト(七十八歳)が、竜次に話し掛ける。

恵美子「にいさん、今日からねえ。チバリヨーさい」

竜次「へえ、ありがとうございます」

雅子「よろしく、お願いしますね」

そう言って次の部屋へ向かって行く。

50 食堂 (昼)

円卓がいくつか並べられている。

一つのテーブルで、職員が遅い昼食を摂っている。

寮母の与儀勝江(四十歳)が、竜次に話しかける。

勝江「竜次さん出身は、どこねえ」

竜次「自分は、静岡の伊東っす」

雅子「あらあら、勝江さんの尋問が始ま

ったわ。竜次さん応えたくなければ黙秘権がみとめられますからね」

竜次「自分は、黙秘権なんてしません、正直に応えます」

まじめくさって、応える竜次に一同笑い出す。

51 風呂場 (昼)

入浴介助で、利用者の身体を洗っている竜次と職員。

勝江「竜次さん、シャンプー終わった」

竜次「へえ、これでいいっすか」

汗だくでシャワーを、かけている。

勝江「それよりあんた、この暑いのに長袖のトレーナーは、どうかねえ」

汗だくで入浴介助をしている竜次。

竜次「へえ」

52 寮母室 (昼)

勝江と寮母数名。

雑談している。

勝江「ねえ、変でしょう。こんな暑いときに長袖のトレーナーなんて」

寮母の尚子(三十才)

尚子「そう言えば、話し方もおかしいさね、もしかしたら、背中に刺青があったりしてさ」

勝江「まさかあ」

53 居室8号室 (昼)

恵美子(七十六才)ベッドに上半身を起こして本を読んでいる。

竜次部屋にモップ掛けをしている。

恵美子「にいさんは、ヤマトウだってね。

どこね」

竜次「自分は、静岡の伊東っす」

恵美子「そうねえ、遠いねえ。いつぺえ
ちばりようさい」

竜次「へえ」

竜次が沖繩に来て半年が過ぎた。

54 寮母室（昼）

勝江と雅子が話している。

勝江「かびがいっぱいなんですよ。カマ
ドさんに聞いたら、子供に食べさせるん
だっていうもんだから、取り上げること
もできなくて。主任どうしましょう」

雅子「そうね、困ったわね。いいわ皆さんを
集めてちょうだい」

職員が集められている寮母室の中。

雅子「先ほど勝江さんが、掃除中にカマドさ
んの床頭台から、カビの生えたお弁当を見
つけました。カマドさんは、子供さんにた
べさせるためにとってあるそうです。どう
対処していいか皆さんにお知恵を借りたい
と思ひまして集まっていたきました。さ
て、どうしましょう」

看護婦静江「カマドさんに説明して、捨てま
しょう。中毒でも起こしたらたいへですか
ら」

勝江「カマドさんに、納得してもらうって。
ぼけてるのに」

雅子「そうねえ。カマドさんの子供さんに対
する気持ちを、きづつけないであげたいし
ね」

一同沈黙する。

尚子「それじゃ、だれかがカマドさんを部屋から連れ出している間に、捨てたらどうですか」

雅子「それも一案ね、でも同室の方もみえたらつしやるから、それに何か強引な感じね」

一同また沈黙。

恐る恐る竜次が、手を上げる。

竜次「あのお、自分に任せてもらえませんですか」

勝江「あんた、どうするの」

竜次「カマドさんをきづつけずに、お弁当をもらえばいいんですよ」

尚子「そうよ、どうやるのよ」

雅子「そう、竜次さんがそこまで言うんだつたらやってごらんなさい。だめだったらまたそのとき考えましょう」

勝江「主任、だいじょうぶねえ」

雅子「いいじゃない。介護の仕事に法則はないのよ、なんでも試してみるのもいいじゃない。それじゃ、竜次さんお願いね」

竜次「へえ、それじゃこの黒ざーたーもらいますよ」

黒糖の小袋をポケットに詰込んで、寮母室を出て行く竜次。

その後からぞろぞろとついて行く職員。

55 居室5号室 (昼)

竜次モップを持って部屋の中へ入って行く。

竜次「チャービラッサイ。チャーガンジュウネエ」

声をかけながらカマドのベッド脇の、床頭台に近付く。

竜次「カマドおばあ、チャーガンジュウネえ。

おばあ床頭台も片付けようね。」

カマド（八十八才）

カマド「はい、お願いします。」

床頭台を開けたとたん、腐敗臭が鼻をついた。

折り箱に入った弁当を取り出す。

竜次「おばあ、これどうしたの」

カマド「もうすぐ牛吉がくるからね、カマソウと思つてさ。でも、なかなかこないさあ」

56 居室5号室前の廊下（昼）

勝江「牛吉さんて、去年亡くなつてるわよ」

雅子「カマドさんの心の中には、いつまでも子供のころの牛吉さんが生きているのね」

57 居室5号室（昼）

竜次「おばあ、ワンはイッペーヤーサツサーこの弁当ワンに出来ないかねえ」

カマド「牛吉がヤーサするからねえ」

竜次「これと、かえてくれるねえ」

ポケットから、黒糖の小袋を差し出す。

カマド、困った様子で。

竜次「おばあ、ごめんよ、ワンヤーサツサ

カマド「にいさん、ウサガミソーレー」

竜次「イッペーニヘーデービル」

そう言うと、腐敗臭のする弁当を、その場で、おいしそうに食べ始める竜次。

58 居室5号室前の廊下

勝江「あら、食べちゃつてる。馬鹿だよあのひと」

雅子「ほんとね、食べちゃつてるわね。でも竜次さんの気持ち、分かるような気がしない」

一同うなづく

雅子「でも、全部たべるきかしら。静江さんおくすり用意しておいて頂戴ね」

静江「そうですね」

59 居室5号室

竜次「おばあ、マーサッサー」

竜次にお茶を差し出しながら、笑顔で見つめるカマド

食べながら大粒の涙を流している竜次。

竜次「おばあは、世界一やさしいおばあだよ。ワラバーのために、自分は一口も手をつけずにとって置くなんてさ。そんな大事な弁当をワンみたいな人間にくれるなんて」

食べながら、大声で泣き出している竜次。

60 居室5号室前の廊下

一同も泣いている。

61 寮母室

雅子「竜次さんまだ、トイレなの」

勝江「はい、あれじゃ当分出てこないんじゃないかと」

雅子「そうね、全部食べたものね」

勝江「ほんと、あれじゃ犬もそっぽ向きますよ」

62 事務室

竜次が電話に出ている。

洋の声「兄貴、おれいまどこから電話してると思います」

竜次「どこにいるんだ」

洋の声「えーとゴヤってゆうところ。兄貴、探したんすよ」

竜次「おめえ道わかるのか」

洋の声「兄貴、ガキ扱いしてくれちゃ困りますぜ。こうして、沖縄まで来てるんですぜ」

竜次「迎えに行こうか」

洋の声「よしてくださいよ、タクシーとゆう便利なもんがありますから。そんじゃ、待つててくださいよ」

竜次「おう、気をつけてこいよ」

電話を切る竜次。

その様子を見ている亜紀子。

竜次「友達が、来るんです。」

亜紀子「あら、珍しいわね。あたし、竜次さんは、天涯孤独な人かと思つてた。なんとなく陰がある感じで。ときどき、思うの竜次さんて昔どんな暮らしして来た人なんだろうって。」

そう言いながら少し恥ずかしげに、うつむく亜紀子。

63 愛の園玄関前

玄関前で表通りを見つめて、立ち尽くす竜次。

「台のタクシーが入つて来る。

中から転がるように、飛び出してくる洋。洋「あにきー、おれ逢いたかつたんだよ」

竜次に駆け寄り、抱きつきしまいには大声で泣き出す。

竜次「わかつたよ、悪かつたよ」

洋「俺、もうあにきからぜつたいに、離れねえ」

竜次「おお、わかつたよ。それじゃ園長先生に挨拶に行こうか」

洋「へえ」

64 園長室

園長と向かい合って竜次と洋が座っている。

古見「あなたが洋さんですか。塚田先生から連絡がありましたよ。なんでも、竜次さんの居場所を教えてもらうまで帰らないと言って先生の家の前に座り込んだそうですね」
竜次「お前そんなことしたのか。それで、塚田先生には御迷惑をおかけしなかったでしょうか」

古見「いえね、最初は、塚田先生も素性がはつきりしませんし、せつかく平穩に暮らしてる竜次さんに迷惑になるんじゃないかと思ひ、無視したそうなんですよ。ところが、洋さんは三日間何も口にせず。座りんでいたそうです。それで、塚田先生も根負けして、事情を聞き、居場所を教えたそうなんですよ」

竜次「無茶なことしやがって」

洋「へへへそりゃ、ここぞというとき身体張ったるのが男ちゆうもんですよ」

竜次「何が男だ、人様に心配掛けやがって」
古見「でも竜次さんは、良い弟分をお持ちです、ね、大切にしていあげなさい。それで、今日は、洋さんともお話もあるでしょうから、これで上がりなさい。後は、私が主任に話しておきますから」

竜次「ありがとうございます」

洋もつられるように、古見に頭を下げる。

65 竜次の部屋 (夕)

夕日を見つめている洋。
テーブルでコーヒーを入れている竜次。

洋「兄貴、ここの夕日の海、伊東の海に似て
ますね」

竜次「洋よ、おめえ、俺に何か話があるんじ
やねえのか」

洋「兄貴、おれ極道って筋の通ったもんだと
おもってやした。でも今は違うあんな世界
はこっちから願い下げですよ」

洋は外を見つめたまま涙ぐんでいた。

竜次「何かあったんか」

洋「柏木の頭刺されて、死にました」

竜次「それは、本当か」

洋「こんなこと、適当に言えますかい」

ガックリと肩を落とす竜次。

しばらく、沈黙の二人。

竜次「それで、いつやられたんだ」

洋「ひとつきぐらい前です。ひさみの姉さん
から知らせがありました。姉さんは、こう
なると竜次さんも危ないから、知らせなさ
いと言ってくれました。それで、おれ必死
で兄貴の居場所探したんですぜ。それでや
っと刑務所のおっさんが、そう、あれはえ
ーと佐々木とか言うてましたわ。事情を聞
いてくれて牧師の先生教えてくれたんです
わ」

竜次「それで、やったのは東進会のやつらか」

洋「それならまだ、頭も浮かばれますよ。須

藤組の堀田のやつですよ」

竜次「須藤組、身内じゃねえか」

洋「だから、汚ねえっていうんですよ。親の
言いつけで動いて、自分の身が危なくなり
やゴミみてえに捨てやがって」

竜次「そうか……」

いつしか、外は闇に包まれている。

66 愛の園居室8号室

竜次と洋が年寄りの着替えを手伝っている。

恵美子「やっちいい、このちんぐわ（着物）にしてちょうだい」

洋「兄貴、ここじゃやっちいてよばれてるんすね。やっちいってどうゆう意味なんすか」

恵美子「あんた、やっちいって言うのはね、にいさんって言うのをね、愛情を込めて言うときに使うのさ。あんたも早くやっちいって呼ばれるようにちばりよーさい」

洋「そうなんすか、やっちいい、なんかいい響きっすね」

竜次「洋、関心してねえで5号室手伝って来い」

洋「へえーい」

67 居室5号室

カマドの着替えを、手伝い始める洋。

洋「かまどおばあ、やっちいいの洋さんですよどのちんぐわを着ましようかね」

洋、カマドのロッカーから、着物を取り出す。

カマド「ワンネエー、チンシーヤムツサア」

洋「はいはい、この着物はだめですか。それじゃこれにしますか」

カマド「イエーコノフリムン、ワンワチンシーヤムンドウ」

洋「はあ、これは、古い着物ですか。でも新しいみたいだけどなあ」

そう言いながら、洋、別の着物を取り出

し、カマドに着せ始める。

カマド「アガッ、アガヨ」

そこへ竜次入って来る。

竜次「なにやっつてんだよ、カマドさん痛がつてるじゃねえか」

洋「だってよ兄貴、このばあさん、このチンシーはいやだとか、ふりいもんだとかぜいたくばかり言つてよ。こりやたぶん若いときぜいたくばかりしたんですぜきつと」

竜次カマドおばあとなにやら話し込んでいる。

竜次、少し笑いながら。

竜次「ばあか、カマドさんはな膝がいたいつておまえに何度も言ったけど、おまが聞いてくれなかったつて言ってるんだ。チンシーつていうのはな膝のこと。フリムンつていうのはなばかもんつていうことだ。よく覚えておけ」

洋「ちえ、日本語で言つて下さいよ日本語でそんなわけのわからねえ、外国語言われたつて」

竜次「洋、もとの日本語はな、沖縄の方言なんだよ。俺達が使つていた日本語はなそのあと勝手に都合よくかえられちまった、流行語みてえなもんよ」

洋「兄貴、それ本当ですかい」

竜次「おう、本当さ。少しは沖縄の文化も勉強しねえとな」

洋「へえ」

カマドの膝へ湿布を貼り、着物を着せ終え車椅子へ介助し終えた竜次。

カマド「ヤッチイグワ、ニハーデービル」

竜次「このやまとうにいさん、ユルシテイクミソーリヨ」

カマド、洋に向かって笑顔で。

カマド「にいさん、チバリヨーサイ」

洋「はい、ちばりまあーす」

66 竜次の部屋

コーヒーを飲みながら、本を読んでいる
竜次。

玄関の呼び鈴の音。

竜次ドアを開ける

67 竜次の部屋の前

男が三人立っている。

男A「島田竜次さんですね」

竜次「ああ、そうだけど」

男A「同行してもらいましょうか」

竜次「ああ、」

観念したように、男たちが用意した車に、
乗り込む竜次。

山原の碎石場跡。

男達に囲まれている竜次。

竜次「須藤のおやじに頼まれたんかい」

男A「まあ、そんなとこだな」

竜次「頼まれたのはおれだけなんだな」

男A「依頼があったのは、それだけよ」

竜次「そうかい、じゃあさつさとすましちま
ってくれ」

男A懐から拳銃を引き抜き、竜次のこめ
かみに銃口をあて、引き金をひいた。

その場にばったりと倒れこむ竜次。

69 愛の園の中

愛の園の日常風景。

入所している年寄り達の姿。

忙しく働いている洋と同僚達の姿。

洋のN「わたしは、ヤッチイと呼ばれた男の
意思をついで今も、ここにいる。やつと皆
さんにヤッチイと呼んでもらえるようにな
りました。あにき、喜んでくれますか」

70 沖縄の海 (夕)

夕日に輝く海。

(おわり)